



ἀγγελία

教養教育ニュースレター

ア

ン

ゲ

リ

ア

第2号

秋

岐阜大学
教養教育推進センター

No.2 September 2006

教養教育への工学部としての取り組み



教養教育推進センター員（工学部） 三松 順治

工学部では、学部開講科目として、「フレッシューズセミナー」・「現代テクノロジーの展開Ⅰ・Ⅱ」を開講し、工学部教員も、多くの個別科目の自然科学系、総合科目の授業の担当を行っております。少数ですが、スポーツ系の担当もあり、平成18年度からは、英語Bの一部（平成18年度は3授業、平成19年度以降は9授業）も担当しております。工学部学生は全学の約4割を占めるので、全学共通教育では、大きな受講者割合になっていますが、工学部全体の教員の中で、教養推進センターの授業を担当している割合は、約1/3で、上記の学部開講科目を含めると、間接的には、ほぼ全員の教員が関連しています。工学部では、一部の教養科目を高年次履修にしながら、専門科目を低学年で履修させ、工学者（エンジニア）としての素養を早期に学ぶようにカリキュラムを構成しています。昨今の事例で示されているように、工学者として必要な事は専門知識のみだけでなく、人とのコミュニケーション、国際的な感覚、デザインセンス、倫理観、文化知識など、多様な素養が裾野的に不可欠です。その重要な部分を、大学に入学して直ぐに学ぶのが、教養教育と考えます。

では、上記の教養教育の現体制で、工学部の学生が必要な教養を学ぶ体制が整っているのでしょうか？私観ですが、残念ながら、ある程度のレベルにはありますが、充分とは言えない状況だと思います。工学部としての教養教育の授業理念および授業体系が、学生に明確に示されておらずに（or理解されておらずに）、大所見地に立っての教養授業編成を行い、学んで貰う様な体制が万全でないと思います。現状の教養教育では、端的に言えば、寄せ集め的な授業の集合母体から、選択させていないか心配です。工学部内でも、上記のフレッシューズセミナー、現代テクノロジーの展開の授業で、各学科でユニークな工夫をして、学生の工学分野の基礎事項に興味関心を持たせる努力をしていますが、本当の教養教育には、工学部の教員からでは学べない事もあると思います。他学部においても同様ですので、工学部教員が協力する事で、工学センス（素養の一つ？）を身に付けて貰う事も可能だと思います。全学的に理念に沿った教養教育を創成・運用して行くには、教養教育に携る教員の強い共通意識の形成と、仮想的で留まるにしても一学部としての運用体制が必要と考える此の頃です。



教養教育推進センター員（地域科学部） 小栗 克之

FD研究会を終えて一感想

テーマは「授業評価アンケートのあり方について」ということであったが、本題に入る前に佐々木嘉三センター長から「他大学の教養教育の取組状況について」というテーマで報告があり、そこでは、他大学の教養教育の組織体制や実施方法、授業評価への取組状況等、多方面からの紹介がなされた。その報告に対して、終了後のアンケートの中に、他大学のシステムの利点と欠点を分析して、岐阜大学に最良のシステムを構築するように、という趣旨の要望があり、今後そのような発展的作業も必要かと思われる。

続いて、本題に関して副センター長の小澤克彦氏から前回の学生アンケートの問題点をふまえながら「授業評価のあり方」及び平成18年度後期に予定されている「授業評価アンケート（案）」について、詳細な報告と提案がなされた。とくに後者の案の特徴として、三つの視点（「学生による授業評価」だけでなく、「教員による授業評価」や「学生の勉学意識」）からの調査や、分野別（知識系、語学系、技術系）、教育方法別（複数の教員による授業等）の調査区分がある。新しい調査方法だけに活発な論議がなされた。試行段階にある発展的調査のため、アンケートをする側、される側の多大な労力を必要とするが、それは効果的「授業評価法」を確立するための必要なプロセスであり、確立後はより省力的授業評価調査で、より効果的な授業改善が図られるようになることが期待される。



私の受けた教養教育

土川めぐ美

教育学部国語教育講座4年生

講義に感動する。その講義が自分の心を動かしていく。そんな講義に人は、一生の内、何度出会うことができるであろうか。

私が、大学時代、最も影響を受け、共感し、また、学ぶ意欲をそこから引き出す程心が動かされた講義は、全学共通教育の小澤克彦教授の「宗教論」の講義である。先生の熱心に語りかける言葉一つ一つに私の心は震えた。

その中で、私は、人は激しい悲嘆にくれた時、絶望した時、そこから立ち上がった時、神に訴えるのであらうと思った。神だけではなく、人間同士が信じ合うことより強い力はないとも思った。「もっと知りたい」「もっと考えたい」という気持ちを大学に入学してから初めて持つことができた。

先生の講義は、現在の様々の専門をこえた勉強をし、小学校の教師となる上での教養の基盤となっている。私も、やがてたくさん子ども達の前で授業をする。大学で身に付けた教養をもとに、子ども達を感動させ、学ぶ意欲を引き出し、何かの力をつける、そんな授業をできる様にしたいと思う。

教養教育 授業訪問シリーズ No.2

音楽史Ⅱ ー近世江戸の祭り囃子ー

佐原秀一助教授

副題のとおり、近世江戸の祭り囃子を学ぶ授業です。佐原先生の軽やかな笛の音に乗って、おはやしの太鼓を一生懸命たたいていました。

音色を聞いていると気分も軽やかになります。音をお届けできないのがとても残念です。

この科目を選んだ理由を受講生に聞いたところ、「めずらしい内容だったから」「シラバスを見てぜひやってみようと思った」などの意見がありました。

（全学共通教育事務室長・恩田美喜夫）



一見簡単そうですが、結構むづかしいと思われれます。

平成18年度の前期講義が終わっての課題

教養教育推進副センター長 小澤 克彦

教養教育は、平成18年度から新しいカリキュラムで実施されました。その中で特に目に付いた点をここに整理してみます。

一番大きな問題は、自然科学系分野での補習的な授業、いわゆる「リメディアル教育」にあり、その趣旨が教員・学生に徹底せず、聴講学生の数やレベルや学部間での理解に問題が生じています。この問題は特に大きなテーマとして取り組んでいくつもりです。

さらに自然科学分野では「基礎」と「入門」と分けたその趣旨も理解が難しいようでした。自然科学分野では従来から授業のレベルと学部・学生間のギャップが言われているので、その趣旨の徹底をはかっていきたいと思えます。

総合分野では「7回半で1単位の授業」の開講で授業の幅は広がっているのですが、その授業形態の理解が教員・学生に行き届いていなかったところが見られています。

人文と社会系の分野では「開講テーマの偏り、ないし不足」が問題になっています。これには教員の量とか非常勤の問題が絡んできます。

英語については、従来から「授業日数の絶対的不足」が指摘されています。それを補足するための「自習システム」「学習支援体制」の整備には取り組んでいますが、「学習量」の増大とそれに伴う「教員数」の増大が望まれます。

未修外国語では「半期だけ」の授業の限界性が強く指摘されています。一年通年の開講カリキュラムや、さらに開講科目の整理や拡大も問題となっています。

スポーツ・健康分野では、やはり教員の充実と、時間帯としては一杯なので「集中講義」などを考えたいとしています。

英語教材利用の案内

図書館の AV コーナー（2階のゲートを入れて左手）に、自学自習用の英語教材が配置されました。当初は8月以降の利用を予定していましたが、現在、すでに利用可能となっています。

TOEIC や TOEFL、英検など、自分の英語力を試す各種試験用の教材も揃えてあります。レベルは日本人学習者の中級程度の教材が中心ですが、初級教材や上級教材もあります。授業の合間や夏休みを利用して、皆さんそれぞれの英語能力を向上させるためにお使いください。（著作権の関係から、残念ながら館外貸し出しはできません。図書館内での利用となります。）

英語に限らず、外国語の学習は、普段の継続的な学習が最も肝要です。授業だけではなく、こうした教材利用による学習も進めてください。（なお、後学期からはネットワークを利用した外国語学習システムも整備される予定です。おおいに利用しましょう！）



図書館での利用の仕方

- (1) 教材コーナーから利用しようと思う教材を選んで、貸し出しカウンターへ行く。
- (2) 学生証と引き替えにヘッドフォンと教材を受け取る。
- (3) 指定されたパソコン上で教材を展開し、学習を進める。
- (4) 利用後は、ヘッドフォンと教材をカウンターで返却し、学生証を受け取る。

(教養教育推進センター員【既修外国語部会】伊藤徳一郎)

質問・意見箱から

教養教育について、全学共通教育事務室前に、質問・意見箱を設置して2ヶ月が経過しました。その間に用紙で2件、メールで1件の投書がありました。簡単に報告します。

- ① 教養教育の必要性・重要性の意見と、要望として授業の出席をとってほしいとのことでした。
- ② TOEIC での単位認定の質問。
- ③ 後学期の履修登録の質問。

いずれも、3日以内には回答・返答をいたしました。

窓口で聞きづらいことや、些細なことでも結構です。質問・意見をお寄せください。毎日夕刻に意見箱を開けるのを楽しみにしている職員がいます。

(全学共通教育事務室・山口利哉)



編集後記

ニュースレター「アングリア」の二号をお届けします。「センターからのお知らせ」の他に、教養教育に関わる「学部の取り組み」「授業紹介」「学生の声」を中心に編集していますが、始めたばかりですので何かと不備もあると思います。皆様の一層のご意見やアイデアを寄せていただけたらとお願いして、編集後記にかえさせていただきます。

編集責任者 教養教育推進 副センター長 小澤克彦